沖縄県立博物館紀要　第19号，　41－55，　1993

博物館における教育普及活動のとりくみ

上　門　清　春
（沖縄県立博物館）

The Grips with the Educational Dissemination ofthe Museum

Seisyun UEJHOU
(Okinawa Prefectural Museum)

〔はじめに〕

私は博物館に勤務して今年（1993年３月）で満３年になる。博物館に勤務するまでは、高等学校で生物の教師として生物教育に携わっていた。そのため、博物館教育に関わることもなく、博物館そのものの教育機関としての機能さえ知ることもかった。博物館については、イベントがあるときや観光客のための一過性的な観光施設としての認識しかなかった。

そのような私が現在、当館の教育普及課で教育普及係として、保育園をはじめ小・中・高校の児童生徒、老人会、婦人会の博物館見学学習、さらには、教育委員会の初任者研修等の受け入れ・調整、学習・研修プログラムの編成、ワークシートの作成等の仕事に従事している。

本稿は、在勤３年間の筆者の教育普及活動の実践をまとめたものである。

本来なら、現在の社会的状況や、県の教育主要施策等を踏まえ、博物館教育の理論的深化とその実践的方向性を示すことをねらいとしなければならないが、筆者自身の力量不足のため、本稿では、ささやかな教育普及活動の実践報告と日頃考えている社会教育施設としての博物館教育の在り方等について述べてみたい。

願わくば、本稿が博物館の学芸員等の専門家だけでなく、教育機関関係者、一般の方々の目にもとまり、博物館が、こんな利用の仕方もあるんだ、ということを理解していただき、生涯学習の場として博物館をおおいに利用していただけたら幸いに思う。

1　本県の学校教育における博物館の利用と課題

博物館と学校教育の大きな違いは、何だろう…？

それは、取り扱う教材の質的・量的な違い、すなわち、実物資料が多いか少ないかである。博物館は、実物資料が豊富で、その実物資料を教育的配慮のもとに、地域の歴史・自然史・美術工芸・民俗等について分かりやすく学習できるように展示してあり、学校の教室ではできない実物資料を用いて学習することができる教育施設である。

一方学校教育では、最低限、教科書・黒板・チョークさえあれば授業は成り立つけれども、それだけでは効果的な教育活動は期待できない。そこで教師は、実験実習などの「体験学習」をとり入れたり、「実物資料」を教材として教材化したり、さらに、学校の教室から出て博物館を学習の場として利用したりする工夫がなされるのです。

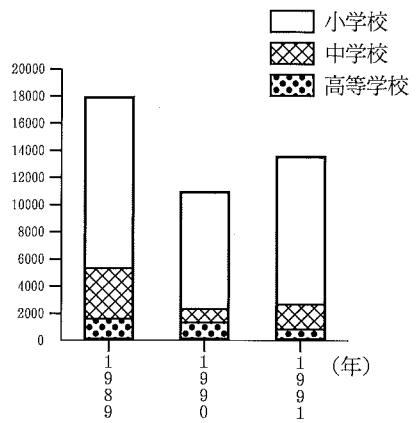
では、本県における学校教育での博物館の利用状況を見てみましょう。

1989年～1991年、過去３ヵ年の県内児童生徒の博物館利用状況は下表のとおりで、それをグラフ化したのが下図である。

県内児童生徒の博物館利用状況

() 内の数字は利用した学校数
〔〕内の数字は県内の全学校数に対する利用した学校の割合

	小学校（人）	中学校（人）	高　校（人）
1989年	12,632 (131校) 〔47.8%〕	3,700 (8) 〔4.8〕	1,607 (8) 〔12.5〕
1990年	8,639 (99) 〔36.1〕	986 (8) 〔4.8〕	1,334 (12) 〔18.8〕
1991年	10,906 (128) 〔46.7〕	1,827 (12) 〔7.2〕	836 (5) 〔7.8〕



表・図で示すとおり、博物館の利用は年度毎に小学校が最も高く、中学校や高校では極端に低くなっている。それは、教育課程に起因するものが大きいと考えられるが、博物館側の教育施設としての役割認識の不足にもあることは否めない。ここでは前者の教育課程について少々触れてみたい。

小学校新指導要領では、「第３　指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の中で、「１　指導作成にあたっては、博物館や郷土資

料館等の活用を図るとともに、身近な地域および国土遺蹟や文化財などの観察や調査を行い、それに基づく表現活動が行なわれるよう配慮する必要がある」と示されている。

このように、小学校の場合は、教科の指導内容が、主に身の回りのことや地域素材を通して指導する、という授業の構成展開が多くなっている。そのために、実際に外へ出かけて活動したり、直接聞き取りをしたり、といった活動が多く取り入れられるので、必然的に、地域素材が豊富にある博物館を利用するようになり、その利用率が中・高校より小学校の方が高くなるのは当然であろう。

ところで、小学校では、博物館を利用する関連教科は主に社会科でその教科内容および学年、当館の常設展示との関わりは次の通りである。

小学校3年生では、「市（区、町、村）の人たちのくらしのうつりかわり」の学習を第4室民俗室で民具等の学習、5年生では、「伝統に生きる工業」を第3室美術工芸室で紅型や漆器・陶器の学習、そして6年生では、「人々のくらしの歴史」を第1室歴史・考古室で歴史資料や考古資料で沖縄の歴史を学習するようになっている。

中学や高校の場合でも、博物館と教科指導との関連性がないということではない。小学校と同様、指導単元はあっても、博物館などの施設を積極的に授業に利用するということが時間的に困難か、あるいは教師側の意識の問題か，いずれかの理由で少ないということではなかろうか。小学校の博物館利用の目的は、主に、教科指導であり、中学・高校では、学校行事（遠足、修学旅行等）やクラブ・部活動、特別展等の団体見学などが主流をなし、学習形態は、教師の引率型がもっとも多く、生徒個人もしくはグループ学習での利用形態は少ない状況である。

平成4年度の県内高校の博物館学習を利用目的でみてみると、南部農林高校1年生（90年～92年現在）が社会科の授業、読谷高等学校家庭科の1年生が家庭科の授業を常設展示室で実施した。球陽高等学校1年生と、開邦高等学校1・2年生が、学年行事として団体見学、浦添高等学校と首里高等学校が社会科等の教科担任の主体的計画で、ホームルーム単位で特別展「尚家継承琉球王朝文化遺産展・1993年1月5日～2月14日」を見学学習した。

1989～90年の高校の利用状況が91年に比べて、はるかに多くなっているのは、89年には特別展「ヤンバルの自然」、90年には特別展「大アンデス文明展」があり、その展示会に対する博物館の学校に対する積極的な公報活動が功を奏したものと考えられる。

中学の場合も同様に考えることができるが、91年に多くなったのは、博物館学習研究指定校（当館発行の中学生のための博物館学習ノートを利用して博物館学習の研究をしていただいた那覇市立首里中学校1・2年の生徒、約800余名）の利用があったからである。

このように小学校では、教育課程に基づいて計画的に博物館学習が実施されているが、

中・高校では必ずしも計画的な博物館学習ではないような気がする。学校教育現場における博物館の利用は一過性的であってはならない。地域の博物館を学習の場として利用するのは、そこに、地域を学習するのにふさわしい実物資料が豊富にあるからである。歴史の語りべである展示資料を児童生徒が直に触れたり、見たりすることができるからである。そういうことから学校教育現場でも、博物館側と協力して、実物展示資料をいかに教材化して利用することができるか、という研究をすることも重要な課題である。

では、博物館の実物展示資料や豊富な博物館資料はいかにすれば教材化することができるのだろうか。

まず、教師が、博物館に親しみを持ち、博物館に頻繁に出入りし、博物館職員とのコミニュケーションを多くとることです。そして、各展示室には、どういう実物資料が展示されているか、テェックすることから始める必要があるのではいでしょうか。そして、展示実物資料が地域の歴史や自然史等のなかでどういう位置付けができるのか、あるいは、どう教材として児童生徒に提示できるのか、などを研究する必要があります。その結果を、教師自身が博物館での授業実践に結びつけることができれば教材とし成り立つわけです。

しかし、教師の現実は日々の教壇実践に精一杯で、時間的にも厳しく博物館を利用しての授業研究なんてそうできるものではないと思う。そこで、授業実践の場が学校の教室から博物館の展示室へ移るのだから、博物館での授業実践の主体を博物館の学芸員に置き換えたらどうなるのだろうか、といく観点でみると、また別の角度からの教育普及活動ができるのではないのかと思う。そこで、当博物館における教育普及活動の現状について述べる。

2　博物館における教育普及活動

博物館法第１章第２条で、「博物館とは、歴史、美術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリェーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（公民館と図書館は除く）である」と規定している。すなわち、資料の収集・保管・研究・展示公開と教育普及活動が博物館の任務である。それを受けて第３条に、その目的を達成するために行なわなければならない事業・10項目を規定している。その中で教育普及的事業内容を列挙してみると下記のとおりである。

① 一般公衆に対して、博物館資料の利用に関し必要な説明、助言、指導等を行い、又は研究室、実験室、工作室、図書室等を設置してこれを利用させる

② 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等作成し、及び領布すること。

③ 博物館資料に関する講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、……

④ 学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学校又は文化に関する諸施設と協力、その活動を援助する。

昭和41年（1966年11月）に近代的な博物館として開館した当館も、27年を経過した今日では、施設そのものの老朽化と狭さ等、生涯学習の場としての機能も果たせないのが実情である。とくに、①の研究室、実験室、工作室、図書室等は皆無であり、普及活動に支障をきたしながらも下記のとおり各種年間行事、教育普及活動を実施しているところである。当館の教育普及活動についてはその実践を詳しく後述する。

◇ 展　示　会・・・新収蔵品展、企画展、特別展

◇ 講　　座・・・博物館文化講座、教育ボランティア養成講座、展示室解説会

◇ こども教室・・・夏休み見る・歩く・作る教室

◇ 刊　行　物・・・各展示会の図録、沖縄県立博物館年報、研究紀要、教育普及書、小学生のための博物館学習ノート、中学生のための博物館学習ノート、高校生のための博物館学習ノート。

◇ 解　説　書・・・博物館総合案内、博物館案内リーフレート（日本語・英文・中国語）、博物館学習のための博物館利用の手引き。

◇ 公報活動・・・年間行事ポスター、展示会ポスター、博物館だより等の発行と配布掲示依頼。マスコミ等への公報依頼

◇ そ　の　他・・　来館者への解説、県博友の会の育成、博物館における各種研修会・博物館見学学習の受け入れ・調整・ワークシートん作成・研修・学習プログラムの作成援助、各機関等への講師派遣。学校の教育研究への協力、博物館資料の学校教育等への貸し出し・展示指導、移動博物館等の実施。

さて、前述したように、博物館は社会教育施設である。その役割を十分果たすには、積極的な行事の Plan・Do・See と、来館者に対する適切な対応、「また博物館に行ってみたい」という魅力あふれた博物館づくりに努めなければならない、といっても過言ではない。

博物館というのはとかく暗い、敷居が高く入りにくい、利用しにくいという閉鎖的イメージが強すぎた感がする。これは、博物館の教育施設としての役割認識不足から生じたイメージである。だから、いつでも、だれでも、気軽に、利用できる「開かれた博物館」づくり

に、館長はじめ職員が一体となってとりくまなければ解決できない問題である。開かれた博物館とはどういうことなのだろう、「どうぞ勝手に見て下さい」、「自由に使って下さい」、「見せてやる」、「教えてやる」といったようなものではないはずです。学習活動の一端を担っている教育施設としての姿勢を博物館自身がしっかり認識し、実践することです。そのことが、教師をはじめ来館者の博物館に対するイメージアップにもつながり、博物館にいけば「何か」が求められる、満たされる、解決できる、教室ではできなかった教育効果が期待できる、そういう場所になってこそ、来館者も自然と増え博物館が学習の場として活気づくだろう、と考えられます。

幸いなことに、「沖縄県立博物館の管理に関する規則」が、平成4年9月12日から実施された「学校週5日制」に伴い、博物館をより広く開放して県内の児童生徒の学校外活動の機会の充実を図る目的で改正され、観覧料が以下の場合に免除された。

「県内の小中高等学校および盲・聾・養護学校の児童生徒および引率者が教育課程に基づく教育活動として常設展を観覧する場合と学校週5日制の休業土曜日に常設展を観覧する場合はその観覧料を免除する」ことにとなった。(1992年9月1日から施行)

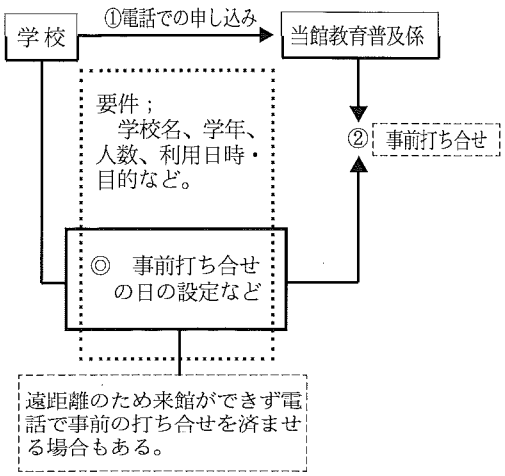
《援助的博物館学習の実践例》・・・・ワークシートのとりくみ

学校側からの一方通行的な博物館学習でなく
学校と博物館が連携した効果的な博物館学習のとりくみ

前述したように、博物館は従来、観覧施設としての比重が高く、博物館利用における教育論が未発達な状況にある。博物館が教育機関として、教育界に市民権を得たのは昭和26年「博物館法」が制定されて以来のことである。ところが、教育方法論の立場からみると学校教育と比較して博物館教育はきわ立って遅れている状況である。本来、博物館は学校と異なり、市民の自由意思による自己教育の場である。博物館はそれらの来館者に対して展示の意図や目的、内容を正確に理解して貰うべく効果的な博物館教育の方法を確立することが重要である。それと同時に、実物資料の少ない学校教育に対して、学校では求めることのできない博物館資料を通しての情報を積極的に提供することが望ましい。

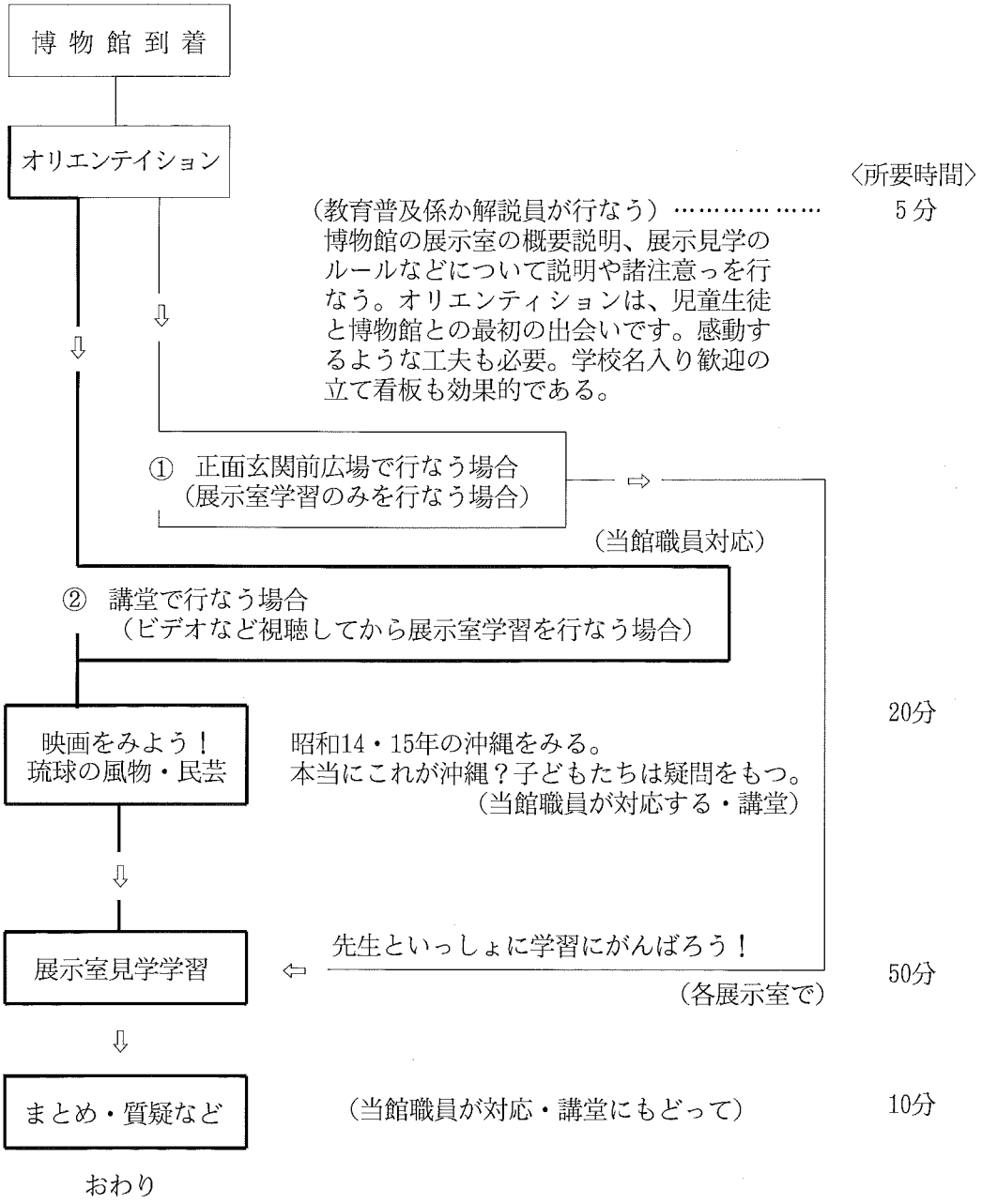
その手法のひとつとして、博物館学習を側面から援助できる博物館ワークシートの作成と活用がある。筆者が平成2年（1990年）10月から現在まで取り組んできた教育普及活動の一環としての、学校の受け入れと博物館ワークシートの作成について述べる。

【受け入れの手順と事前打ち合せ】



博物館学習を実施する前の、学校と博物館との事前打ち合せは、両方にとってとても重要な関わりとなる。それは、博物館を学習する場として位置付けるとともに学校に対しての博物館の果たす役割、学校の博物館学習の目的・内容が明らかになり、来館当日の両方の役割分担が明確になって博物館学習がスムーズに実施できるという利点がある。可能な限り博物館に来ていただいて実施している。打ち合せの内容は学習の目的・内容、学習する展示室、学習プログラム、学習課題とワークシートなど。詳しいことは別添資料参照。

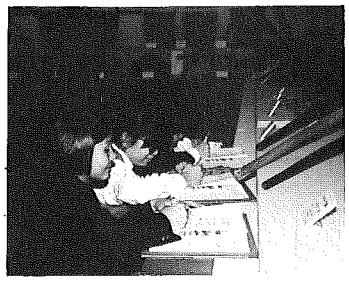
【博物館学習当日のながれ】



【博物館ワークシートのとりくみ】

博物館には、観覧者のために、すくなくとも２種類の印刷された手引書などが用意されていなくてはならない。その一つは館案内（リーフレット）であり、もう一つは学習教材としてのワークシートである。リーフレットには、館内における展示室の配置図や展示概説、トイレなどの位置がわかるように印刷されていて、たいていどの館にも用意されている。ワークシートはどうだろう、県内の資料館や博物館をみるかぎり準備している博物館は少ないか、もしくは準備してないのが現状である。学習教材としてのワークシートの目的は、観覧者に対し、展示物のどこを観察すればどんなことが分かりますとか、あるいは、展示物の見方の誘導，質問をしながら展示物に引き込んでいくためにつくられるのである。つまり、ワークシートとは、特定のテーマや展示物に対して観覧者の注意を喚起させ、引き付け、想像に富む観察を刺激するように設計され印刷された教材ということになる。

当館は、総合博物館で、郷土の自然史、歴史・考古、美術工芸、民俗についての展示で構成されている。前述したように、小学校３年生は昔の人びとの暮らしを民俗室で、４年生は公共施設の学習を博物館の施設見学とあわせて展示室見学、５年生は伝統工芸を美術工芸室で、６年生は歴史の学習を歴史・考古室に学習のめあてをもって来館する。これらの児童生徒が各めあてに対し、どのような観点から展示物を観察すればよいか、大変重要な博物館学習の実践課題である。そこで当館では、事前の打ち合せのときに、学習のめあて・内容、展示資料と教科学習内容との関連性、取扱う展示物は何にするかなど話し合い、それをもとに児童生徒が展示物を見ながら記録学習ができる内容のワークシートを、筆者（教育普及係）が、作成し、当日児童生徒に配布して学習させるようにしている。ワークシートの学習量は―― 多くてもいけないし少なくてもいけない―― 難しいところだが、筆者は学習テーマを１～２題に絞って作成している。それは、その２題を学習した児童生徒は、解決した喜びと自信によってその他の展示物はどうだろうか、と興味と関心をもって発展的に観察するようになる。このように、博物館は、学習をする場であり観光気分で見学するとこではないんだということを理解させるためにも、素通り見学でなく記録学習ができるような博物館学習を目指したいものです。



ワークシートでがんばっている子どもたち

初伝研の先生方
博物館学習にがっばんています。

《博物館学習・研修のためのプログラムの例》

プログラムの例その１

ある小学校６年生の場合
（およそ２時間コース）

9:00　開　館

9:30

☆　オリエンティーション
（主として講堂で）

9:40
①　昔の沖縄を映画でみよう。
（20分・講堂）
題名；琉球の風物
琉球の民芸

（昭和14～15年頃の撮影日本民芸協会）
②　昔の沖縄の映画をみてどんなことを感じましたか、感想を言おう。
（５分・講堂で）

10:05

☆　歴史室・自然史質・美術工芸室・民俗室でワークシートや学習課題の調べ学習

10:55

☆　疑問に思ったこと、分からなかったこと博物館の学芸員に質問しよう。
（講堂で）

11:15　さようなら！

プログラムの例その２

初任者研修会　（那覇教育事務所）
1992年度２月13日（木）実施

※

2:30

☆　開講・歓迎のあいさつ

2:40

☆　映画をみよう
若い先生方昔の沖縄、知っている？

3:00

☆　講話：博物館の利用について
（博物館でこんなことができます）

3:30分
（休　憩）

3:40

☆　講　話:沖縄の文化・泡盛のはなし

4:10

☆　展示室見学学習

4:50

☆　閉講式

5:00　解　散

郷土学習に博物館をおおいに利用しよう！

資料 1

ご協力おねがいします

【この資料は博物館学習のあり方を考えるための資料です。
下記の項目についてご記入方、宜しくお願いします。】

博物館学習の打ち合せ

■ 団体名・南風原町立翔南小学校 6年生

■ 世話する方の名前・新垣睦子
☎

来館日はいつですか	平成 4 年 5 月 1 日(金)
何時ごろですか	(あさ) 10 時 30 分頃～ごご 12 時 30 分頃まで
どのような方々ですか	翔南小学校 6年生 119名
どんなめあてを持って来館しますか ★ 可能な限り詳しく書いてください。特に学校の団体見学の場合は学校行事、教科指導との関係、単元との関わりなどについても書いて下さい。	・春の遠足で利用：歴史学習のスタートを切ったところなので博物館見学をさせることで歴史に対する興味・関心を高めたい。 ・社会科単元名「地域の歴史を見直そう」 ▲ 地域に残る歴史事象を調べることから、昔の人々の様子について関心をもたせる。 ▲ 展示室にある湧川人・貝塚出土器等から、大昔の人々のくらしの特色などを見つけることができる。 ▲ 首里城に関する話や、ビデオの視聴、館内展示物は歴史を伝える
学習日程の打ち合せ 時間の配分、どんな学習資料を作成するかなど	10:30 オリエンテーション 11:00 ・首里城周辺の花・昔でなよう財のはなし・昔の沖縄・映画 11:20 ・映画の感想 11:30 ・展示室見学 12:20 ・学芸員に質問 12:30 渡久地先生のワークシート

— 51 —

資料 2

ホットニュース No.22

沖縄県立博物館
教育普及課発
1990.10.18(木)

与那原東小3年生のみなさんいらっしゃーい！

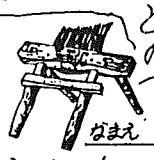
クイズにチャレンジ

第4室でみつけよう

むかしの人々は、きびしい環境(かんきょう)のなかでせいかつするのにさまざまな工夫(くふう)をしました。したのどうぐなどのなまえとなんのためのものかしらべてみよう。

なまえ

りようのしかた



なまえ

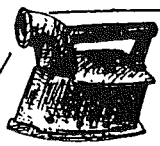
りようのしかた

なまえ

りようのしかた

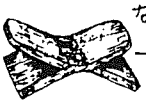
なまえ

りようのしかた



なまえ

りようのしかた



なまえ

りようのしかた

なまえ

りようのしかた

なまえ

りようのしかた

沖縄県立博物館 教育普及課 1992.

博物館 ま〜い

諸君は、これまでの学習で「今に生きる人々のくらしと社会のようす」を知ることができたと思います。今の私たちのくらしは、遠いむかしからこの大地にくらしてきた私たちの祖先から受けついだものです。むかしの人々はどんな願いをもちながらくらしていたでしょうでは博物館の各展示室の展示物を見ながら沖縄の歴史などをさぐってみよう。

(NHK 総合テレビ 放映中 坂本竜馬)

私たちの祖先しらべ

いつ頃から沖縄に人がすむようになったでしょうか。このガイコツは第1展示室にあります。次のQ(キュウ)について調べてみよう。

沖縄本島南部
玉泉洞近くで発見された

Q1. この大昔の人は何人と呼ばれているか

Q2. 今から何百前ぐらいにすんでいたか

Q3. この大昔の人はどこで発見されたか

Q4. この人の身長などとくちょうをしらべておこう。

沖縄人はえらい！

今年は、沖縄が日本復帰をして20年になります。そして首里城も完成しました。昔、この首里城を中心に、沖縄県の政治などがおこなわれていました。その時代琉球王国は、下の船で他国と貿易を行えていました。それは今からなんと600年前のことです。その時代の沖縄についてしらべてみよう。

Q1. まず、この船のなまえをしらべてみよう。

Q2 この船はなんのためにつかいましたか。

Q3 この船の乗り組み員は何人でしたか。

Q4 その当時の琉球は中国や他の外国との貿易のため、多くの人々が行きかうようになり、外国のすぐれた文化や風俗がとり入れられ、それらが現在私たちのみじかな生活の中に残っています。どんなものがあるかしらべてみよう。

Q5 現在知られている日本最古(もっとも古い)の人骨は亡くなと呼ばれている人で、今から何百前にすんでいたと考えられているか

。 年前

資料4

ホットニュース

沖縄県立博物館
教育普及課発
1990. 10. 13
No. 18

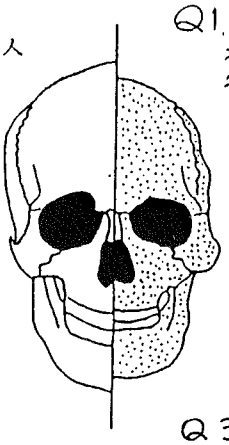
歓迎 登野城小六年生のみなさん！

遠く八重山からようこそいらっしゃいました。登野城小学校のみなさんには次のクイズをプレゼントいたします。どうぞがんばって下さいね。

展示室のあんない

第1室・歴史・考古
第2室・自然
第3室・美術工芸
第4室・民俗

第1室でみつけよう！



Q1. 左半分は現代人の頭骨右半分は、今から18,000万年前の日本人の祖先と考えられている頭骨で沖縄島で発見されました。日本人の祖先と考えられている右半分の人々を何人といいますか。

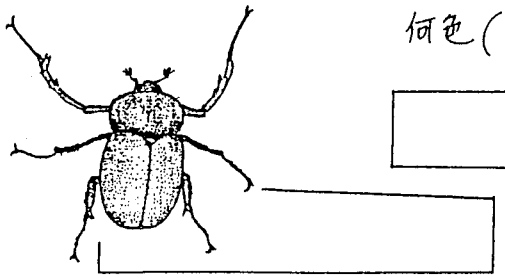
Q2. 発見された村名

Q3. 発見された遺跡名

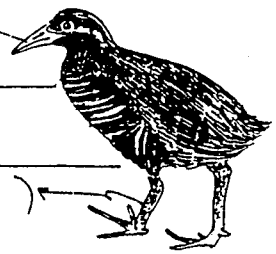
第2室でみつけよう！

Q1. この展示室の中に石垣島や西表島にしかすんでない動物たちがいます。さがしてみよう。なんという名の動物たちかな！3つなまえをかこう。

Q2. 石垣島や西表島ではまだ発見されていませんが、沖縄本島の北部にすんでいるいきものたちのスケッチ図です。なんという名のいきものたちでしょう。



何色（　　）



何色（

資料 5

来館者への情報提供

ホットニュース

秋の風物

サシバの渡り

日一日と秋深まる

沖縄県立博物館
教育普及課発
1990. 10. 10(水) NO.19

寒露の頃 群れて
渡る サシバ群団

サシバ
♂オスはカラスより小さく
♀メスはカラスくらいの大きさです

すごいなあ

四季を通して、緑と花の絶えない沖縄でも、自然界での「いきもの」たちは、その変化を確実にキャッチするのです。そして、それぞれに合った生活のようすを私たちはみることができ、沖縄での季節の変化を知ることができるのです。

サシバの渡りもその一つです。毎年寒露(今年は10月8日・通常は10月10日前後の二週間)の頃になると、何千羽・時には何万羽ものサシバが、大空を北から南へ南下していくのがみられるのです。

果物が熟れる時期

この頃はまた、果物の熟する時期でもあり、沖縄本島北部の本部半島、本部町の伊豆味では、カーブチー(ミカン)の収穫、どっとおしよせるミカン狩でにぎわう季節になります。

- 秋田県以南の夏鳥(春に繁殖のため日本に渡り秋に寒い冬をさけて、温かい南の島々に渡る鳥)
- 繁殖・年一回5~6月
- 卵は2~4個産む。
- 約2ヶ月で成長
- 食性・ネズミ・トカゲ カエル・バッタなど